

コメデイ

「最終章を先に描け！」

1
1
8
分

大岡
俊彦

【登場人物表】

葦澤 猛（にらさわ たけし 50）
流星出版のウルサイ編集者。

上山 亮（かみやま りょう 30）

神考察サイトの主、PN神山リョウ。
普段は医療機器メーカーの営業。

えりりん（深町（ふかまち）えり 31）

神絵師。100キロの巨漢。
のち、50キロに痩せる（別役者）。

寺嶋（てらしま 48）

メカ、背景専門のベテランアシ。

QT（27） 有名コスプレイヤー。

戸田（29） 葦澤の後輩。

敦子（48） スナック「敦子」のママ。

葦澤の元妻。

サラリーマン1（40） 漫画ファン。

サラリーマン2（40） 漫画ファン。

山根（28） 精鋭社の編集。

渡辺（40） 精鋭社の編集。

犬塚編集長（60） 精鋭社「少年チャンプ」
の編集長。

ミツルギ剣（みつるぎ けん 50）

国民的漫画「天空のファルコーン」
の作者。しかし9年休載中。

○師走の、流星出版編集部

菲澤（50）「うーいース」

と、扉を開けて編集部に入って来る。

菲澤 「は？」

20人ほどの編集部はもぬけの空。

本棚も空、壁には唯一漫画雑誌『月刊バズーカ』の古いポスターが。

菲澤 「えっと……あれ？」

菲澤の机（資料や雑誌が山積み）と編集長の机。

隅のほうで、段ボールに本を詰めていた戸田（29）。

戸田 「あ、ニラさんおはよッス」

菲澤 「え……戸田……何これ？」

戸田 「ああ、ウチ潰れたじゃないですか」

菲澤 「え？ ええええ？」

戸田 「知らなかったんすか？」

菲澤 「倒産ってこと？」

戸田、編集長の机をさす。

戸田 「夜逃げです」

机上に「す」「ま」「ぬ」の3枚の紙。

菲澤 「たった3文字で済ませんなよ！ し

かも打ち文字かよ！ 出版の人間なら辞世の句ぐらい筆で書けよ！」

戸田 『月刊バズーカ』は廃刊、そして来月の給料は振り込まれません」

菲澤 「え、じゃあ、作家さん達どうすんの」

戸田 「ああ、幸い引く手はあったので、全員散り散りに、よその雑誌で続けられることになりましたよ」

菲澤 「そうか（ほっと胸を撫でおろす）……：ていうか、お前は」

戸田 「僕は精鋭社に移ります。結構横のつながりあるんで。あ、編集者は皆よその出版社に移れましたよ、念のため」

菲澤 「なにそれ」

戸田 「……もしかしてニラさん、誰からも誘われなかったんですか？」

菲澤 「……」

戸田 「あー、ニラさん嫌われてたからなあ」
菲澤 「え、そうなの？」

戸田 「だってニラさんすぐ『つまらない』
って言うじゃないですか」

菲澤 「は？ そりゃ編集者たるもの漫画に
正直であるべきで、第一の読者として作家
に向き合うのが……」

戸田 「それが古いんですよ。今時の若者は
否定されたら即『終わったー！』なんです。
この時代、ほめる所を探して、なあなあに
無難に……」

菲澤 「だから潰れたんだろ！」

戸田 「だから誰からも声がかからなかった
んじゃないですか？」

菲澤 「……」

○夜、スナック「敦子」

カウンターからつまみを出すママの敦
子(48)。

菲澤 「という訳で、しばらくこの店にも来
れなくなるかも知れない」

敦子 「そんな、元妻の店に義理堅く通う方
がどうかしてるわよ」

菲澤 「でも定期的に通わないと、ここ潰れ
るじゃん」

敦子 「……間に合ってますわよ、多少は」
酒の棚に漫画が置いてある。

『天空のファルコーン』1〜34巻。
敦子 「ああ、ウチの若い子が寄付してくれ
てね」

菲澤 「あれの百分の一でいいからヒットが
欲しかったよ……」

菲澤が飲み干すと、もう一杯出てくる。
菲澤 「しかし俺、そんなに嫌われてるとは
知らなくてさ」

敦子、テーブルの女の子たちを見て。

敦子 「若い子見ると分るけど、ちよっと
褒めるとひよいひよい動いてくれるわよ？
割り切った操縦術みたいなものよ。殴り合

って名作をつくる時代が終わったの。それ
くらいイケメンのアンタなら分るでしょ」

菲澤 「ん？……ま、まあな」

敦子 「(してやったりと指さす)」

菲澤 「(引っかかったのに気付いて)これか」

敦子 「これ」

○まっぴるま、菲澤の部屋

狭い四畳半。たくさんの漫画だけが本
棚を埋め尽くしている。

腹が鳴る。隙間風。

菲澤 「……」

○コンビニ

菲澤 「ありがとうございますー」

と店員姿で客を見送る。

× × ×

店内を巡回する菲澤。漫画雑誌のコー
ナーで立ち止まり、乱れた雑誌の整理
をする。

そこへサラリーマン(40代)の二人
が、週刊少年「チャンプ」を取って。

サラリーマン1 「アレ？ 天ファル、今週か
ら再開の筈だけど？」

サラリーマン2 「いや、また延期だっさ」

サラリーマン1 「えー！ なんだよ！ 9年

待ったんだぞ、暗黒島編！」

サラリーマン2 「9年待ったんだから、もう

ちよい待っても同じだろ」

サラリーマン1 「9年どころか、俺たちは3

0年完結を待ってんだぞ？ 太一は無事家

に帰れるのか？、ってさー」

漫画棚には『天空のファルコーン』最
新刊。「連載再開！」の帯。

サラリーマン2 『ベルセルク』は作者が先に
死んだ。『ガラスの仮面』は読者が先に死ん
でる」

菲澤 「……」

○公園

ベンチで制服姿のままコンビニ弁当を
食べ終えた葦澤。

遊具で遊ぶ子供。『チャンプ』を読んで
るオッサンサラリーマン。

葦澤 「あれ？」

思わず立ち上がり、手の中の空き缶(天
ファルコラボコーヒー)を握りつぶす。

葦澤 「俺たちが先に最終回まで描いちまえ
ばよいのでは？」

○オープニング

『週刊少年チャンプ』の表紙に『天空
のファルコーン』。

ナレーション「国民的漫画『天空のファルコ
ーン』！ 作者ミツルギ剣、『週刊少年チャ
ンプ』の看板漫画であるッ！」

休載の囃。毎週連載が隔週に、数カ月
休み、数年休み、最後には9年中断。

ナレーション「だがこの名作にひとつだけ、
ひとつだけ欠点があるッ！ この漫画は休
載だらけなのだ！ 週刊連載のくせに休載
は続き、30年続いているのにわずか34
巻しか出ていない。最終章暗黒島編を前に、
すでに9年止まっているのだッ！」

その周りにSNSの字と声が。

SNS 『つづきはよ』

SNS 『ミツルギ仕事しろ定期』

SNS 『まだやってたんか』

SNS 『終わったらまとめて読むつもりだっ
たわ』

SNS 『アニメ3期、第一話からやり直すっ
てよ』

雷に打たれたような葦澤の表情。

タイトル「最終章を先に描け！」

○幕張、冬コミ会場

コミケの大規模さに戸惑う葦澤。
右も左も新鮮な光景。

「新刊」「パロ」「A×B」「リバ特集」
「NTR有」などの文字が踊り、コス
プレ売り子たちに戸惑う。

スマホで写真を撮ろうとすると、スタ
ッフに声をかけられる。

スタッフ「撮影可能エリアは向こうとなって
おります」

葦澤 「ああ、すまん、こういう所初めてで
(スマホをしまう)」

そのエリアを見ると、コスプレをした
QT(27)が、多数のカメコに囲ま
れている。

葦澤 「コスプレイヤーのQTじゃん！」
思わず写真を撮ろうとしてスタッフに
にらまれる。

「天空のファルコーンはこちら」の看
板を見つけ、その方向を見て驚く。

葦澤 「うおっ……」

端から端まで全部天ファルサークルだ。
「やっぱ人気あんだなー」
と、ひととき行列サークルが。

サークルのポスターを見て驚く葦澤。

葦澤 「原作完コピじゃん！ スゲエ！」

スタッフ「神絵師えりりん、最後尾はこちら
です」

その主、えりりん(31)は、100
キロの巨漢の女性。

女性ファンと握手していて、ファンた
ちはきやあきやあ言っている。

葦澤、最後尾に並ぶ。

○同、休憩エリア

新刊本のビニールを破り、中を読む。

葦澤 「なんじゃこりゃ！」

内容はハードなBL。ヴァン・ジーク
フリートとゼロソードがキスしたりセ

ツクスしたり。

「アワアワしながら最後まで読む。

……が、突然プロの目に戻る。

菲澤 「オチが甘いな」

もう一度、最初から読む。

菲澤 「……」

立ち上がる。

○同、付属カフェ

えりりんはパフェ7杯を食べている。

えりりん 「このパフェ好物なんですう！」

菲澤 「7杯は多すぎでは……」

えりりん 「これでも遠慮してる方ですよおー！」

機嫌のいいタイミングを見計らって。

菲澤 「で、本題なんだが」

えりりん 「……『最終章を先に描く』って、つまり私が暗黒島編を描くってこと？」

菲澤 「その通りだ。誰もが続きを待っている。ミツルギ先生は仕事してくれないんで、だから俺たちがやるんだ。えりりん先生が一番原作の絵にそのままだった。デッサン力もある。線は艶めかしく思いきりがいい。構図のセンスもテンポもまるで原作」

えりりん 「あ、ありがとうございます」

菲澤 「……ただ一つだけ！ 一つだけピースが足りないんだ！ そして致命傷……」

えりりん 「……」

菲澤 「（小声で）ストーリーが全然なんだ」
えりりん 「（泣き出す）そうなんですー。私ス

トーリーが苦手でえー」

菲澤 「あ、ご、ごめんなさい、言い過ぎた」
えりりん 「いえ、本当のことなんです。それが悩みなんですうー」

ハンカチで涙を拭き、豪快に鼻をかむ。

菲澤 「原作者を見つけて、二人一組でやる手もある。俺が考えてもいいし、原作者は探せる。死ぬほど面白い漫画をつくって、しかも儲けたいんだ！」

えりりん「……私はBLだけやればいいんですよ。ジーク様とゼロきゅんのイチャコラを眺めるだけでいいんです。それでぶっちゃけ生活できてますし」

菲澤「年収……400万？」

えりりん「(首を振る)」

菲澤「(指を5、6、7……10と出す)」

えりりん「(うなづく)」

菲澤「やっぱすげえな、二次創作界限」

えりりん「あの……『神サイト』はご存じです？」

○夜、菲澤の部屋

スマホで調べる菲澤。その画面。

菲澤「これか」

× × ×

回想、カフェ。

えりりん『神山の天フル考察サイト』、通称『神サイト』。天フルの展開予想や考察サイトは死ぬほどありますけど、ここがダントツです。オメガマシン編の展開を当てて有名になりました」

菲澤「？」

えりりん「ライラックの魔女の、死と復活」

菲澤「あー、あれ！びっくりしたよなあ。」

え、あの神展開を当てたの？」

えりりん「(うなづく)サンダーボルト編の雷

銀座。七つの果実編の八つ目の果実。ゴッ

ドシープ編の竜一族。全部当ててます」

菲澤「マジか。神がかってる」

えりりん「だから神サイト」

× × ×

「最終章『暗黒島編』予想」を見て、
起き上がる菲澤。

× × ×

えりりん「この人が書く天フルのストーリー

ーなら、私描いてみたい」

菲澤「えっ」

えりりん「ファンなんで！ Xもフォローし

てるんですよー！」

× × ×

色々検索を始める。

WIKI 『なお神山の本名、年齢、職業などは非公表』

菲澤 「編集部のリサーチ力、舐めんなよ」

○ある医院1〜8

机に出される医療機器のパンフレット。
セールスマン上山（30）が医師に営業中。

上山 「このTR5000とTS3000を組み合わせれば、今までにない強力な診断ができてまして……」

医師1 「あのさ。説明が抽象的すぎて、よくわかんないんだよ」

上山 「……はあ」

切り返したら、相手の医師と医院が次々に変わっていく。以下同じ。

医師2 「君はこれをつくったエンジニア並みの知識がないし」

医師3 「これを使う医師の現場も知らない」

医師4 「それで両者の仲立ちになっているのかな？」

医師5 「ていうか、君知らないよ。直接これをつくった人と話させてよ」

上山 「は……はあ」

医師6 「じゃあ君、何のためにいるの？ パンフ配り係？」

上山 「……勉強になります。早速当社のエンジニアを連れてまいります」

医師7 「（パンフの裏を見て）ことあなたの会社名違うから、営業だけ外注か。君、中抜き係だな？」

上山 「（引きつって）人聞きの悪い。ご冗談を」

医師8 「まあいいや。ここに直接電話するわ」

○医療メーカーシロヤマのオフィス、営業部

なるべく静かに社に戻る上山。

OL1 「あ、お疲れ様です！」

他の営業部隊が帰って来る。彼女たちに指3本を見せる。

OL2 「3億受注、来たー！」

OL1 「焼肉ゴチです！」

営業たちと女子たちがキャツキャツする。

営業 『役立たずの上山』がモタモタしてる隙に、やってやったよ！」

上山 「……」

出るタイミングを失っている上山。

○夜、上山のアパートの前

菲澤が仁王立ちになっている。

上山 「？」

菲澤 「菲澤猛と申します。漫画編集者をしておりました。上山亮さんと見た」

上山 「……違います」

と、脇をすり抜けアパートに入ろうと。

菲澤 『天フアル神サイト』の神で、あつてますか？」

シユバツと高速で振り向き、鼻の穴が大きくなる上山。

上山 「いえ……いや……本人かも知れないし、違うかも知れませんが……な、何の御用ですか？」

菲澤 「あなたに最終章暗黒島編の原作を書いて頂きたい」

上山 「……は？」

菲澤 「最終回まで描いて、天フアルを終了させるんだ。月一の同人誌即売会やコミケで発表、紙媒体のみでネットに噂を呼ぶ。

絵師はえりりん先生」

上山 「俺、えりりんのXフォローしてるよ」

菲澤 「……じゃあ両思いだな」

菲澤、ジャンピング土下座。

菲澤 「この通りだ！ この菲澤と、チームを組んでくれないか！」

上山 「え、それ8巻のギルモア兄妹のジャンピング土下座？」

菲澤 「そうだ！ この通り！」

上山 「……ジャンピング土下座じゃ足りねえな。バク転しながら土下座したら話聞いてやるよ」

菲澤 「……男に二言はないな！」

○夜、公園の砂場

菲澤 「とうっ！」

とバク転しながら土下座しようとする菲澤。しかし失敗。何度も何度もやっては失敗する。

上山 「いや……もういいですよ……適当に言ったけど、無理っすよ。先に最終章書いて、先に最終回なんて、無理っすよ」

菲澤 「この通りだ！」
土下座からバク転土下座しようとするが、やっぱり途中で転ぶ。

上山 「俺仕事あるし、専業は無理ですよ？」

菲澤 「それも込みで月一ペースだ！」

上山 「なんでそんなに必死なんですか。公式待てばいいじゃないですか！」

菲澤 「……卒業させたいんだ」
上山 「……？」

菲澤 「昔の漫画って、大体3年で終わってたんだよ。あれだけ人気だった『キャッツアイ』ですら4年だ。中学や高校は3年だろ。学校卒業したらその漫画は大体終わってたんだ。みんな漫画から卒業して、部活やったり大学行ったり、恋愛したりバイトしたりしてた。ところが今の漫画は、いつまでもいつまでも引き延ばしやがる！ 太一がアルファ村を旅立って何年たった？ 七本の剣の結末は！ ヴァン・ジークフリートの呪いは？ ライラックの魔女や黒騎士の正体！ いつまで引っ張るんだよ！ 子ヲタクたちは、卒業するべきなんだ！ 子供時代をさっさと卒業して、人生をするべ

きなんだ！」

上山 「……引き延ばしがむごいのは同意します。まるでテセウスの船だ。ウナギのタレを足してうちに、元の味じゃなくなつたみたいな漫画は、一杯ある」

菲澤 『『鬼滅』は幸せに終わったよな』

上山 「例外です」

菲澤 「アンタが一番『天空のファルコーン』を分つてる、神に近い男だと思ふんだ」

シュバツと高速で振り向く。

上山 「神」

菲澤 「原作者ミツルギ剣が真の神だが、上山先生は、今最も神にシンクロしている男」

上山 「神にシンクロ」

上山の鼻の穴が大きくなる。

菲澤 「暗黒島編展開予想。あれは傑作だ。

俺はそれを現実のものにしたい。えりりん先生が絵を描く、俺は手配関係や全体の編集。俺一人じゃ出来ねえ。才能のある人が必要なんだ」

上山 「才能」

再びバク転しようとする。それを止める上山。鼻の穴が大きい。

上山 「大丈夫です。あなたの思いはたしかに伝わりました。書きましよう」

○とあるマンションの前

引越しの荷物が運びこまれる。

テーブル、椅子、本棚、漫画たち。

○同、部屋（以下仕事場と表記）く夕、夜

どん、と積まれる天ファル原作本34巻の3セット。それをみる3人。

菲澤 「まずは一気読みをしよう」

上山 「全部暗記してますよ」

菲澤 「見落としてる所が必ずある」

菲澤は寝転がって読む。

えりりんは号泣したり胸キュンしたり、

拍手しながら読む。

上山は背筋を立てて読む。

夕方になり、夜になる。

× × ×

菲澤 「よし、今から自分の好きな場面を順番に言おうぜ」

えりりん 「そんなの100はあるでしょ」

上山 「俺は200」

菲澤 「ふん。500はあるだろ」

びっしりと付箋が貼ってある。

菲澤 「じゃあ俺から行くぞ? 『笑わせるな、下がれ』だな」

上山 「黒騎士か。18巻32ページ」

菲澤 「流石」

上山 「俺のベストはやっぱゼロソード・グラビティ。中でも5巻の空間を曲げてナル

ティの剣を避けた所が最高にカッコイイ」

菲澤 「ヴン、ヴン、ヴン(右、左、右)」

えりりん 「しかも逆手持ちだと左右逆になるのよ。ヴン、ヴン、ヴン」

上山 「8巻122ページ」

菲澤 「逆手持ち確変した時、そうだったのか、って感動しちゃったよ」

上山 「えりりん先生は」

えりりん 「そんなのジーク様がゼロきゅんを

抱き止めた、3巻に決まってるじゃん!

何度夢に出たことか」

× × ×

菲澤 「『この橋を渡るか、永遠に眠るか』」

上山 「眠りの国編、ゴッドシップ、22巻。

ブルーフィストおおお!」

菲澤 「スパイラル!(ねじる)」

えりりん 『お前のぬくもりは……伝わるよ』

上山、菲澤 「ブル姐! ブル姐!」

菲澤 「ブモー・バモー・ジャハール」

上山、えりりん 「ブモー・バモー・ジャハール!」

上山 『アンチ・マジック・アロウが貫けな

いものがただ一つだけある。アタイの心

さ!』

菲澤、えりりん「ブル姐！ブル姐！」
えりりん「ヤンス！」

菲澤「ノリス！」

× × ×

すっかり朝になっている。

夜食のカップ麺が転がっている。

上山「朝じゃん」

菲澤「この夜を忘れないでおこう。俺たちは酒も飲まず一晩じゅう語り明かした、天

ファルのガチヲタだ」

えりりん「……ふふ」

上山「……はは」

菲澤「終わらせるんだ。太一の旅は、無事終わらなければならない」

○後日、仕事場

その部屋に道具が持ち込まれ、すでに漫画家の仕事場のようになっている。

えりりんは新キャラの暗黒島七王のデザインをしている。

菲澤は壁にメモを沢山貼って、ストーリーの可能性を探っている。

上山はそれを貼り替えて見せる。

別のを貼り替える菲澤。また貼り替える上山。激しい議論。

× × ×

スケッチを見せるえりりん。

上山「いいね。まるで原作から飛び出して来たみたい」

菲澤「コブラ、アルマジロ、ワニ、カラス、シーラカンス、黒ヒョウ、ライオンがモチーフか」

えりりん「です」

菲澤「ムカデとか入らない？」

えりりん「虫キモイ！」

菲澤「だから悪役になるんじゃない」

えりりん「……たしかに。やってみます」

上山「ニラさん」

菲澤「？」

上山 「実は神サイトにも載せてない、とっておきのアイデアがあるんだけど」

菲澤 「それは？」

上山 「第一話で、太陽の子ヴァン・ジークフリートを殺す」

菲澤 「は？」

えりりん 「ジーク様が？ ……嘘でしょ」

上山 「マジだ」

えりりん 「嫌よ。嫌よ嫌よ。なんでジーク様が死ぬのよう！ ジーク様がいなくなったら、私も手首を切って死ぬ。世界から太陽が消える！」

上山 「今の二人のリアクションがすべてです。それが読者の衝撃ってこと」

菲澤 「……」

上山は壁に貼られた無数のストーリーのメモの迷路を見る。

上山 「ジークがいたら、どうやってもこの先の謎は解けなくなる。だけど太陽の子ジークがいなかったら。ここは暗黒島だ」

上山は線を引き、別のメモを貼り付け、移動させる。

菲澤 「あ。…これなら、最終回まで整合性が保たれる。凄い。凄いぞこれ」

上山 「でしょ？ まだこれは誰も考えていない」

えりりん 「そんな、そんな。ジーク様がいなくなったら、ゼロきゅんはどうするの？

一人で世界に残されるの？」

菲澤 「仲間がいるだろ。主人公の太一やスペクターやブル姐やピクリス姫が。ギガントの目覚めを止めて世界を救うには、このルートしかないだろ」

上山 「これはジークの物語じゃない。太一の物語なんだ」

えりりん 『得る為には、失わなければならぬ』…ああジーク様ジーク様！」

菲澤 「できるのか？」

えりりん 「半端な話だったら、私描かない」

○後日、仕事場

菲澤、えりりん、鉛筆書きのネームを
読みながら号泣している。

菲澤 「えりりん……絵、描けるかこれ……
すごいぞこれ……」

えりりん「……死ぬ気でやります……あああ、
ジーク様ああああ」

菲澤 「お疲れ上山先生。あとは作画で勝負」

上山 「俺は残ります」

菲澤 「？」

上山 「よくあるじゃないですか。原作者や
編集者がベタ塗りさせられるやつ。アレ、
俺もやってみたいんす」

えりりん「え……あの……（アップルペンを
見せて）デジタルなので」

上山 「えっ」

菲澤 「今からクリスタ覚えればいいじゃ
ん！ よし、とりあえず飯買って来る！」

えりりん「私パフェ15杯！」
菲澤、上山「????」

○夜、仕事場

ゴツイデジタルデバイスで絵を描くえ
りりん。それにベタ塗りする上山。

セリフの写植をする菲澤。

キッチンで焼きそばをつくる菲澤。大
皿から三人で取り合う。えりりんがそ
れにパフェをかけて、二人ドン引き。

○後日、仕事場

100冊の同人誌。

『天空のファルコーン 暗黒島編第1
話「ゴールデンドーンは輝かない」

ストーリー神山リョウ 絵えりりん』

煽り文『最終章「暗黒島編」開始！！』

三人、感無量。

○同人誌即売会場へ続く道、十字路

左の道から、えりりんがポスターなどを抱えてやって来る。

真ん中の道から、菲澤が同人誌50冊抱えてやって来る。

右の道から、上山が同じく。

十字路で三人は合流。会場へ向う！

○同人誌即売会場

菲澤 「あれ？ QTじゃん。なんでこんな小規模イベントに？」

コスプレイヤーQT、ピコリス姫のコスプレで数名のカメコを連れている。

× × ×

三人、山積みの本の前で緊張。

周囲の盛り上がり比べて客は来ない。

QT 「えりりん先生ー！」

と、衣装とメイクを落としたQTがやって来る。

三人 「？」

QT、さっきのポーズを取る。

えりりん 「ピコリス姫！ ひよっとしてQTさん？」

QT 「メイク落としたら分らないですよね？（笑） ごめんなさい遅くなって。撮

影会長引いちゃって。えりりん先生新刊出すって聞いたから、来ちゃいました！」

千円出す。

えりりん 「あ、……ありがとうございます」

QT 「(表紙を見て)ヤッバ！ 原作神山さんじゃん！ え、待って、えりりん先生と

タッグ組んだの？」

菲澤 「その神山先生がこちらです」

QT 「えっ、ヤッバ！」

上山、鼻の穴を膨らませる。

QT 「あの、この場で感想言いたいので、ビニール破ってもいいですか？」

えりりん 「もちろん」

Q T、少しずつ読み始める。

三人 「……(表情が気になる)」

Q T 「ふふふ」

Q T 「ははは。バク転して土下座。受ける」

菲澤 「……(肘で上山をつつく)」

上山 「(笑う)」

Q T 「えっ！ ジーク様！！！」

大声を出しすぎて、会場全員が振り向く。ごめんなさいと周囲に謝る。

Q T 「(夢中で読む) う……ぐすつ……ぐすつ……えっ……なにこれ……」

パタンと読み終える。

Q T 「……」

再びページを戻り、色々確認する。

Q T 「これ、公式本じゃないですよね？」

菲澤 「公式がいつまで経っても始めないの
で、我々が始めました」

Q T 「握手、してもらってもいいですか」

菲澤が手を出すと、Q Tは上山とえりんとだけ握手して菲澤はずつこける。

Q T 「(胸に本を抱きしめて、周りの皆に) ねえ！ みんな来てよ！ 神サイトの神山先生とえりりん先生だよ！ 『暗黒島編』、ここで始まつちやってるよ！」

皆、動きを止める。

× × ×

皆が思い思いの格好で、地べたに座ったり立って読んだりしている。

菲澤 「二人とも、覚えておいてくれ。これが漫画家が求めてやまない、最高の瞬間だ」

上山、えりりん「……」

菲澤 「無音。人が本当に夢中になっている時は、音が出ない」

上山、えりりん「……」

皆、読み終える。

菲澤 「そして本当に面白い漫画に出会った時、人はどうする？」

皆、ページをぺらぺらと戻って、また読む。

皆 「はあ……」

と一斉にため息をつく。

菲澤 「そして必ず聞かれる言葉を、一生覚えておくんだ」

QT 「続きは、いつ読めるんですか？」

上山、えりりん「……」

鼻の穴が大きくなる。

三人、ハイタッチしようとするが、タイミングが合わない。

菲澤 「へたくそか！」

○会場の外

フルテンションで走り出す3人。

机の上は「完売」の札。

○仕事場

三人ともスマホでエゴサ。

後ろの白壁にSNSの文字が投影され、声で読まれる。

SNS 『「暗黒島編」始めてる人がいるんだけど！』

SNS 『ヤバイ。オモロイ』

SNS 『ずっとずっと……待ってたんだよオオオオ！』

SNS 『つづきはよ』

SNS 『QTが劇褒め！』

SNS 『バク転土下座大草原』

SNS 『俺は……あの……ネタバレについて語りたく……』

SNS 『どこで読めんの？』

菲澤、入力。

菲澤 『次回の○○会場で第二話出します』

ガンガン「いいね」がついてゆく。

× × ×

ネームを書く上山。

絵を描くえりりん。

壁の付箋の前で考える菲澤。

えりりん「あー！ 男女の抱き合い方が分らないー！」

男女のように抱き合う上山と菲澤。
菲澤 「BLでこんなのさんざん描いたろ」
えりりん「スケッチしながら）私男同士専門
なんで！ 女の恋愛とかよく分らないん
で！ 菲澤×上山フー！ てえてえー！」
二人 「……（お互い目をそらす）」

○様々な同人誌販売会場

第二話が山積み。人々が集まる。
ジークのコスプレばかりで、皆腕に喪
章をつけている。

× × ×
第三話。客もコスプレイヤーも加速度
的に増える。

SNS 『ヤバイ！ 面白すぎる！』
SNS 『俺たちはこんな展開を、ずっと待つ
てた』

SNS 『#バク転土下座チャレンジ』
多数の動画が投稿されている。

× × ×
第四話。黒山の人だかり。

「バク転土下座チャレンジ会場」と題
したエアマットがあり、コスプレイヤー
ーたちがバク転土下座をやっては失敗。

○仕事場

上山 「……じゃあブル姐と太一が七天の三
と戦えば済むってことですか」

菲澤 「そうは行ってねえだろ」

上山 「そうとしか思えないですよ！ 何の
為に！ 七天の六と矛盾するでしょ！」

壁の膨大な付箋をさす。
身振りで付箋がなびく。

菲澤 「じゃあゼロを殺すしなくなるだろ」
上山、えりりん「ゼロはだめです！」

菲澤 「……だめだ。煮詰まって来たな。甘
いもん買ってくるわ」
外へ出る。

上山 「……」

腕を組んで貼り紙の前で考える。

えりりん 「作画担当がストーリーに口は出さないと決めてたけど、ゼロはだめですよ。ゼロまで死んだら」

上山 「ジークの思いが無になる」

えりりん 「……(悲しい顔をする)」

上山 「……あ」

えりりん 「？」

上山 「俺たちヲタクはさ、人生でつらい目にあうことが多いから、口角が下がりぎみがデフォなことが多いんだよ。気を付けたほうがいい」

えりりん 「？」

上山 「俺、仕事が営業なので。先輩に指摘されるまで、世の中に不満を持つてるような顔してることに気づいてなかったんだ。自分で口角をあげて見本を見せる。

えりりん 「(表情だけで口角を上げてみる)」

上山 「これくらい」

ほっぺたに指をあてて、引き上げる。

えりりん 「……!!! (固まる)」

上山 「……？」

ガチャリと扉が開き、寺嶋(48)が入ってくる。

寺嶋 「アシスタントの寺嶋です。ニラさんに言われてきました。背景とメカ専門です」

上山 「背景！ 助かるー！ 暗黒島のベタ、難しくて！」

寺嶋、スケッチブックを見せる。おぞましい悪役メカが描かれている。

上山 「うっま！」

寺嶋 「オメガマシン2。ギガント戦の前哨戦にどうでしょう」

上山 「やべえよ！ 何これ！ ね！」
振り返ると。

えりりん 「……(まだ固まっている)」

寺嶋 「あの、えりりん先生ですか」

えりりん 「(気づいて) あ、はい、えりりんです」

寺嶋 「自分アナログなんで、あとでスキヤナ持ってきます」

えりりん 「……あ、はい」

○仕事場、夜

寺嶋、アナログのペンと雲形定規、スポンジなどを駆使して背景を描いてゆく。めちやくちや上手い。トーン削りもカッターでやる。

蕙澤 「テラさんはプロアシの中でも、最高峰の腕と俺が見込んだ男だ」

寺嶋 「でも人物が下手でねえ。だから作家には向かないってニラさんが」

スケッチブックの最初の方は、下手な人物画。

上山 「あ……」

蕙澤 「その代わりバイクとか戦闘機とかヤベえのよ」

別のページのメカが激ウマイ。

上山 「うっわ！ すっげー！」

えりりん、その上山を恋する目で見ている。

蕙澤 「人つてのは凸凹がある。それをパズルのようにチームに組むのも編集の腕よ」

寺嶋 「今日の分終わりなので、お先に上がります」

○翌朝、仕事場

ガチャリと扉を開けて入ってきた蕙澤、ビビる。

えりりんはメガネをつけず、フリフリ
の服で絵を描いている。

えりりん 「おはようございますー」

蕙澤 「……」

えりりん 「あ、コンタクトに換えたんですよ

おー」

蕙澤 「いや、服とか」

えりりん 「女の子なんだし、オシヤレしなき

やと思つて！あ」

菲澤 「別に今日誰も来ないぞ。上山は仕事だし、テラさんは別アシだし」

えりりん 「オシヤレは誰にも見せない所からですよ。今日の分終わったら原作二週間空きますよね？ お休みしてもいいですか？」

菲澤 「もちろん」

えりりん、口角を上げて笑う。

○二週間後、仕事場

美女 「おはようございますう！」

ドアを開けて入って来たのは、すらつとした50キロ級の美女。

上山、菲澤、寺嶋、固まる。

美女はえりりんの席につき、慣れた手つきで椅子の高さを変え、iPadや機器類の立ち上げをする。

三人 「????」

美女 「やだー！ 深町えりですよー！ えりりんです！ ちょっとダイエツト頑張つたんで！ てへっ！」

菲澤 「いや、別人じゃないか」

上山 「中の人変わったろ」

えりりん、絵を描く。BL絵。

えりりん 「これで信用できます？」

三人 「えりりんだ……」

にこりと笑うえりりん。

× × ×

ネームに煮詰まり、ベランダで煙草を吸う上山。ちらりとえりりんを見る。絵を描くえりりんはそれに気づいて口角を上げた笑顔。

緊張しながら、会釈する上山。

菲澤 「なんか……美人がいるとソワソワするな」

寺嶋 「着ぐるみの中に姫が入ってたとは」

○夜、スナック「敦子」

敦子 「そんなの恋に決まってるんじゃない！」
葦澤 「やっぱそうだよな。急に激やせでガ
ツキーみたいになって、パフェも一滴も食
べないんだぜ？」

敦子 「それよりまたここ来れるの？」

葦澤 「同人誌って儲かるんだよ」

敦子 「そりゃ良かったことで」

棚に、4話までの同人誌が本家の続き
に置いてある。

葦澤 「あれ」

敦子 「ああ、うちの若い子が、面白って」

葦澤 「ありがてえ」

敦子 「サイン書いてよ」

葦澤 「バカ、編集者は裏方だ。俺のサイン
じゃ価値ねえよ」

敦子 「あなたが始めた物語なんだから、あ
なたがフロントよ」

葦澤 「……ふん（照れる）」

○夜、仕事場

帰り支度をした上山。

それを見てえりりんも上着を着る。

えりりん 「あ、一緒に帰りましよ、上山さん」

上山 「えっ？」

えりりん 「あっ。あの、打合せしたいことが
あるんで。スペクターのローゼンクロイツ
の件で」

二人出てゆく。

取り残される葦澤と寺嶋。

寺嶋 「俺さ、上山がえりりんの頬触ってる

ところ、見ちゃったんだよ」

葦澤 「えっ」

寺嶋 「初めてここ来た時」

葦澤 「そんな時から付き合ってたの？」

寺嶋 「いや、全然まだな感じだろ。ニラさ
ん、案外そういうの察し悪いタイプ？」

葦澤 「は？」

寺嶋 「だから女房に逃げられたか」

葦澤 「アンタは」
寺嶋 「誰か紹介してよ。17歳くらいがい
いんだけど」
葦澤 「犯罪だろ」

○夜、踏切

踏切が開くまで待つ上山、えりりん。
えりりん、上山のメガネを外す。
えりりん「ヤバイ！メガネ取ったらイケメ
ン！」
上山 「ちょっとやめてよ。見えないよ」
えりりん「じゃあチャンス」
えりりん、キスをする。
びっくりして固まる上山。
踏切上がって周囲の人は渡るが、二人
は動かない。
えりりん「私デブでモテなくて、だからヲタ
クになって、現実の恋愛とか興味なくて。
……でも今なら分る。少女漫画の気持ち」
上山 「……」
メガネを返すえりりん。ぺこりと一礼
して走って去ってゆく。

○仕事場

表紙のカラー絵。
全部ピンクで塗ってある。
葦澤 「なんで全部ピンク色なんだよ」
えりりん「全部ピンクじゃないですよ。ピ
ンクって200色あるの。ね？ 上山さん」
上山 「えっ」
葦澤 「……まあ、変化球としてはヨシとす
るか」

○同人誌販売会場

そのバラ色の表紙が次々に売れてゆく。
最後尾行列を仕切っていた葦澤、何事
かに気づいて、荷物を片付けはじめる。

上山 「？」

菲澤 「(耳打ち)お前ら二人ともいつもの表情のまま聞け。目線も俺に合わせるな」

二人 「？」

菲澤 「上山から。北階段の方をゆっくり見て視線を戻せ。背広の男、二人」

そこにいる山根(28)と渡辺(50)。

菲澤 「次はえりりん」

えりりん 「(同じく盗み見る) 誰なんです？

あの人たち」

菲澤 「精鋭社の山根と渡辺」

二人 「？」

菲澤 「本物の『天空のファルコーン』の編集者だ」

上山 「えっ」

えりりん 「ヤバいじゃん！」

菲澤 「本は全部アタツシユケースだ。一、二、三で南側にダツシユ」

金庫を持つえりりん。

菲澤 「一二の三！」

三人、ダツシユ。

菲澤 「(客に) すいません、急用につき、今日の販売はここまで！ 次の〇〇で売ります！」

山根と渡辺、こちらに気づく。追いかけてくる。

菲澤 「すいません、そこどいて！」

会場内チェイス。

三人がぶつかってコスプレの人が転んだり、机をひっくり返して本がぶちまけられたりの大騒動。

廊下でもチェイス。

エレベーターに乗る三人。山根と渡辺の目の前で閉まる。

階段で追う二人。次の階でエレベーターを降りた三人は、非常階段へ。

菲澤 「こっちから駐車場いけるぞ！」

○会場の外、駐車場

菲澤 「タクシー！」

たまたまいたタクシーに乗り込む三人。
タクシー発車。

山根 「タクシーもう一台います！」

渡辺 「よし！」

もう一台に乗り込む二人。

山根 「前の車を追ってください！ ……あ、

ヤバくないですか？」

渡辺 「何が？」

山根 「人生で初めて漫画みたいなセリフ言

っちゃいました！」

渡辺 「黙ってろ！」

○少しのチェイス

交差点で止まったままの、山根渡辺の
タクシー。

山根 「(左右を見て) 見失った……」

○会場の外、駐車場

回想。

菲澤 「車に乗るふりしてやぶに隠れろ！

運転手さん、5万円上げるから、好きな所
に飛ばして！」

空のタクシー、発車。それを見た山根、

渡辺は追いかけていく。

回想終わり。

やぶから出てくる三人。

上山 「ニラさん、悪知恵だけは働きますね」

菲澤 「だろ？」

○仕事場

S N S 『#天ファル5話、突然販売中止』

S N S 『なんで？』

S N S 『私買えなかったんだけど』

S N S 『なんか二人組の男から逃げてた』

S N S 『ヤクザ？』

S N S 『少年「チャンプ」の編集者らしい』

SNS 『公式に見つかっちゃった！？』

SNS 『どうすんの？ 発表中止？』

SNS 『つづきは！』

SNS 『第5話再販祈願バク転土下座会場はこちらです』

みんなバク転土下座にチャレンジ。

えりりん 「どうしよう……。公式バレとは……。私たち、中止させられるかな」

上山 「なんでだよ。だったらあの膨大な二次創作、全部禁止だろ」

菲澤 「厳密には著作権違反だからな。出版社も原作者も盛り上がるなら、と黙認してるのが現実だからさ」

上山 「そもそも引き伸ばしのチャンプ商法が悪いんだ」

菲澤 「……俺が始めた物語だ。悪知恵働かせるから、待ってろ」

○同人誌販売会場

渡辺 「なんだこりゃ！」

売り子が全員ジークのコスプレ。

山根 「ナベさん、全員ジークですよ！」

渡辺 「見りや分るわ！ 誰がどこにいるか分からんって寸法か」

山根 「あっ！ あの絵！」

第5話のピンク表紙がサークルポスターとして貼ってある。

渡辺 「アイツか！」

走る二人。

渡辺 「ん？」

あちこちにそのポスターが貼ってある。

渡辺 「葉っぱを隠すなら森の中……」

山根 「(テーブルを確認して)ここは違うっす！」

渡辺 「クッソ！」

きよろきよろして走り回る二人。

を、二階から見ている菲澤、上山、えりりん、QT(全員ジークコスプレ)。

菲澤 「ふっふっふ。コスプレの達人、QT

さまのおかげよ」

QT 「ジーク様の衣装なら、何着つくつても楽しいです」

葦澤 「よし、散るぞ。森の中に潜め」

× ×

山根 「あ！ あれじゃないですか？」

売る本に紛れて葦澤版のピンク表紙。

渡辺 「現行犯で捕まえるぞ！」

売り子の所へ。

渡辺 「お前らが海賊版を描いている奴らだな！」

売り子 「えっ。……うちらは委託されただけなんで」

渡辺 「くっそ……雲隠れか。一部下さい」

売り子 「合言葉は」

渡辺 「えっ？」

売り子 「予約サイトの、合い言葉を」

渡辺 「えっ、あっ……風はすぐ吹く」

山根 「なんでガンダムなんですか！」

売り子 「お次の方ー」

目の前で買われていくのを悔しがる山根、渡辺。

○仕事場

SNS 『回を追うごとに面白くなる』

SNS 『でも最近調子乗ってない？』

SNS 『暗号販売はやりすぎ』

SNS 『お前前回の騒動知らねえの？』

SNS 『そもそもなんでジークが死ぬんだよ。殺す意味あった？』

SNS 『売名行為だな。有名になりたいからジーク殺したかと思おうとイラつく』

SNS 『才能ない奴ほど登場人物殺したがる』
スマホから離れない上山。

葦澤 「エゴサもいい加減にしろ。毒だぞ」

上山 「だって……気になるじゃないですか」

これまでは目の前で読者の反応が見れたのに」

葦澤 「プロは、暗闇にマシンガンを撃って、

当てなきゃならんのだ」

○ベランダ、夜

煙草を吸う上山。ついスマホを開く。

○別の日、仕事場

ネームを読み終えた葦澤。

葦澤 「どうした？ こんだけ待たせてこれ？」

上山 「……もう分んないス。プロの凄さ分りました。毎回毎回、どんどん面白くなるなんて、もう無理っスよ」

葦澤 「……没」

上山 「……」

横目でそれを見るえりりん。

○次の朝、仕事場

真っ白なままの原稿を前に頭をぐしゃぐしゃにする上山。

上山 「無理！ もうニラさん来ちゃう！

発狂する！ 無理！」

寺嶋 「……それを、スランプという」

上山 「テラさん、どうやって抜けるんスカ」

寺嶋 「それが分らなかつたから、俺はアシ

スタントに留まった」

上山 「……」

寺嶋 「そういう時は、逃げるんだ」

上山 「えっ」

寺嶋 『探さないで下さい』って置き手紙して、『3日後に戻ります』ってな」

上山 「そんなベタな！」

寺嶋 「温泉にでも浸かって休むことだ」

えりりん「(テンション上がる)温泉！」

× × ×

葦澤が差し入れをもって入ってくる。

葦澤 「あれ？ 二人は？」

寺嶋 「(置き手紙をさす)」

菫澤 「ハア？ 行先は？」

寺嶋 「聞いてねえス。今日来たらこうなつてて」

菫澤 「猪口才な！ そこだけプロ漫画家み
たいなことを……！」

寺嶋 「まあ待ちましょ。週刊じゃないしさ」
菫澤 「……」

○電車の中

でもスマホを見ている上山。

それを奪うえりりん。

えりりん 「休むって決めたでしょ。熱海、近いのに行ったことないから超楽しみ！」

上山 「……」

えりりん 「二人っきりの初旅行」

肩を寄せる。鼻を膨らませる上山。

○夜、露天風呂、女湯

えりりん 「……」

○夜、露天風呂、男湯

上山 「……」

○夜、並べられた布団

二人 「……」

えりりん、三っ指をつく。

えりりん 「私デブのモテナイ女だったので、この年まで処女でした。頑張りますので、よろしくお願いします」

上山 「……あの、じつは、申し訳ないけど、俺も童貞なんです」

えりりん 「えっ」

上山 「陰キヤだったんで」

えりりん 「私の方が陰キヤで」

上山 「俺の方が陰キヤで」

えりりん 「私の方が」

二人、笑う。深呼吸。

上山 「頑張りましょう。二人でいい夜にしましよう」

えりりん 「私も頑張ります」

二人 「(同時に)対戦よろしくお願いします」
同時過ぎて、笑う。

○朝、同じ布団で目覚める二人

えりりん「……世界が平和になるといいのに」

上山 「……俺もそう思う」

上山、えりりんの髪を撫でる。

えりりん 「昔の話して？」

上山 「話したじゃん」

えりりん 「もつと」

上山 「じゃあ小学校の時。後ろに貼ってあった習字を、全部『初日の出』から『初日の出』に書き換えた」

コロコロと笑うえりりん。上山の髪を撫でる。

えりりん 「もつと」

上山 「もうないよ。いたずらしてたのは中学までだよ」

えりりん 「高校の時は？」

上山 「ずっと窓の外見てた」

えりりん 「何が見えたの？」

上山 「ゼロソード・グラビティとか、ブルーフイストとか」

えりりん 「その時間が、神サイトを産んだのね。そして今の私たちも」

上山の髪を撫でて。

えりりん 「もつとして？」

上山 「もうないよ」

えりりん 「お話じゃなくて。(キスして)もつとして？」

上山 「(鼻を膨らませる)」

○朝風呂の混浴に二人で入る

上山 「思いついた！」

○仕事場

ネームを読み終えた葦澤、寺嶋。

葦澤 「なんで熱海に行くんだよ」

上山 「いや、休息がたまには必要でしょ」

寺嶋 「いや、暗黒島に熱海はねえだろ」

上山 「あるんですよ！ A―TAMI」

葦澤 「じゃあいつそ漢字の熱海でいいよ」

えりりん 「きゅ、休息が必要なんですよ！」

葦澤 「？」

えりりん 「ジークの死という悲しみにずっといることも出来ない。一行は前に行かなければ。漫画を描くのにも休息はいるでしょ。人生だってそう。七王とストームを倒す前の、休息は必要でしょ」

寺嶋 「たまに挟まるコメデイ回か」

葦澤 「……なるほど、シリアスにやって来たからこそそのコメデイ回……あるな」

上山 「世の中には理想郷がある。シャングリラ、エルサレム、ユートピア、そしてA―TAMI」

えりりん 「あ、お土産あります！」

バナナワニ園のクッキー。

葦澤 「お前らが熱海行って来たんじゃないかねえか！」

○同人誌即売会場

バカ売れ。SNSが重なる。

SNS 『大草原 WWWW』

SNS 『A・T・A・M・I！』

SNS 『A・T・A・M・I！』

○夜、同人誌即売会場の倉庫

に忍び込んだ、全身黒タイツの山根と渡辺。

山根 「ナベさん、なんかこれ、コナンの犯人っぽくないですか？」

渡辺 「犯人なんだからこれでいいだろ」
山根 「犯人じゃないですよ。ちよつと脅す
だけでしょ？」

目の前にうずたかく積まれる同人誌た
ち。その中のひとときわ大きな山に、『暗
黒島編7話』。

天井のプリンクラーを見て。

渡辺 「スプリンクラーでびちよぬれ。火責
めというより水責めよ」

マツチを擦って置き、ずらかる二人。

○テレビニュース

キャスター『○○会場が全焼しました』

○精鋭社編集部

のテレビで見てコーヒーを噴き出す山
根と渡辺。

キャスター『なお施設の経営は悪化しており、
経費節減のため防災施設に電源は入って
いませんでした』

渡辺 「ハアアアア？」

オーナーのインタビュー『いやー、ちようど
建て直し検討しててー。怪我人もなく、解
体費用も浮きましたよー！』

キャスター『防犯カメラには犯人と思しき人
物が映っていました』

カメラの映像に黒ずくめの二人。

○仕事場

SNS 『犯人』

SNS 『犯人のコスプレ』

SNS 『物理 炎 上』

SNS 『人気に火が付く！（物理）』

次回予約の通知がバンバン入る。

荻澤 「やべえ……次は、3000冊用意だ」

壁のニュース映像（炎上）を背景に、

4人は決意を新たにす。

○幕張、夏コミ会場

看板 『物理炎上でブレイク！ 天空のファ
ルコーン暗黒島編最新話！』

猛烈な行列。

歯ざしりしながら見ている山根と渡辺。

渡辺 「くそう。これで俺らが出張ったら、

逆に炎上しかねん……」

と、全身黒ファッションの男が。

男 「あれかい？」

と指さす。

山根 「はい。あいつらです」

男 「そう」

人だかりの中に進む男。

菲澤 「最後尾はこちらです！……あつ」

思わず後ずさる菲澤。

歩みを止めない男。

人々、男の正体を分り、モーゼの十戒
のように道を開ける。

男はそのままゆっくりと歩き、売り場
で止まる。

男 「一部下さい。合言葉はブモー・バモ
ー・ジャハール」

えりりん 「……せ、1000円です」

男 「チャンプなら300円なのになあ」

同人誌とお釣りを受け取り、サングラ
スを外して会釈。

男（ミツルギ、50）『天空のファルコーン』
作者の、ミツルギ剣です」

上山 「……存じてます」

ミツルギ 「君が描いたの？」

上山 「僕が原作、彼女が作画」

震えるえりりん。手を握る上山。

ミツルギ 「へえ。付き合ってるんだ。きみら」

上山 「はい」

ミツルギ 「全部読んでるよ。おもしろい」

えりりん 「えつ。あ、ありがとうございます」

ミツルギ 「君たちに感謝する、って直接言い
たかったんだ。ありがとうって」

上山 「？」
ミツルギ 「おかげさまで、始める覚悟が出来たので」

上山 「えっ」
えりりん 「再開するんですか？」
その大声にみんな驚く。

去ってゆくミツルギ。振り向いて。

ミツルギ「来週のチャンプ、楽しみにしてて。

……俺の方がおもしろいよ」

二人 「……」

○早朝、コンビニ

トラックがコンビニに納品中。
走ってくる4人。

蕪澤 「4冊くれ！ 釣りはいらん！」
1万円札を運転手に握らせる。

○コンビニの前、早朝

チャンプの表紙は、『天空のファルコーン最終章暗黒島編ついに開始！』と。
駐車場に座り込み、読み終えた4人。

4人 「おもしろい……」

天を仰いで溜息をつく。

再びページをめくり、読み返す4人。

上山 「正直、負けです」

えりりん 「ミツルギ先生の線は違うわ。ここも、ここも、私には描けない」

寺嶋 「メカヤバすぎ。何人アシスタント抱えてんだよ」

蕪澤 「そして何より……」
うなづく3人。

蕪澤 「ジークフリートは死ななかつた」

上山 「どうするつもりだよ！ 太一の冒険が終わるためには、それが最善手だろ！

さんざん考えただろ！ これじゃハッピー

エンドになれないんだよ！」

蕪澤、立ち上がる。コンビニの駐車場に立つ。

朝の光が当たって、日向とビルの陰が半々になっている。

その真ん中に葦澤が立ち、光の側と陰の側を指す。

葦澤 「こっち（陰）がジークの死んだ世界線、こっち（光）が生きてる世界線。世界は二つに分岐した。…そして、今の所こっち（光）の方がおもしろい」

上山 「それじゃ俺たちが悪役みたいじゃないですか」

葦澤 「じゃあ、こう（手をクロス）」

○川沿いの帰り道、朝

を歩く4人。

向こうから40代のサラリーマン二人（冒頭のコンビニの客）が走って来る。

サラリーマン1 「あのコンビニならあるって、チャンプ！ 都内で一番早いんだって！」

サラリーマン2 「なんか小学生以来だな！

走って漫画買いに行くって！」

4人とすれ違う。

その背中を見送る4人。

○仕事場

壁に続々とSNSが。

SNS 『最高の』

SNS 『9年待ってた』

SNS 『30年待ってた』

SNS 『これが公式の力よ』

SNS 『才能という暴力』

SNS 『海賊版同人、息してる？』

SNS 『ジーク様！ ジーク様！』

SNS 『来週まで全裸待機』

SNS 『荒行過ぎる（笑）』

3人がスマホを見続ける中、上山だけが壁の膨大なメモを見ている。

○夕方、仕事場

夕方。窓から差し込む斜めの光。
その先が一筋の光明のように、上山の
貼り替えた道を示している。

寺嶋 「オイ、比較サイトができてるぞ」

画面を見せる。壁に投影。

葦澤 「海賊版1話から10、9、9、7、

8、10、6…… 本家1話15。10点

満点じゃねえのかよ！」

上山 「俺でも10点以上上げますよ。それ
くらいすごい始まりだったし」

その画像は拡散されてゆく。

○夜、ミツルギの仕事場

大学の講義室のような、縦に移動す
る二枚の大黒板があり、そこにびっち
りメモ書きが書いてある。メモの粒度
は上山より細かく、分岐が多い。

ミツルギ 「ジークが死ぬルートは、大団円ま
でたどり着けないんだよなあ……」

大きく二股に分れている下のルートに、
×をつける。他のパターンもすべて×
を。

巨大な壁にほとんど×がつけられて、
細い細いたった一本の道が現れる。

ミツルギ 「勝負だ、海賊」

○コンビニの前

揃って第二話を読む4人。

四人 「……おもしろい……」

評価サイト、本家 15 13。

○一週間後、コンビニの前

四人 「はあ……」

評価サイト、本家 15 13 12。

寺嶋 「俺ら全敗じゃん」

上山 「俺たちが先行してる分、向こうは後出しじゃんけんだろ。向こう有利だ」

菲澤 「作り手の有利不利とか、お客さんは見るか？」

皆、首を振る。

上山 「こっちは月1じゃないですか。本家は月4。4ターン攻撃を毎回くらうことになる」

菲澤 「たしかに。読者の心証もよくない」

上山 「次のラスト、書き換えていいですか」
えりりん 「え、作画、終わってるのに」

上山 「本当にごめん。こっちだって後出しできるだろと思って」

菲澤 「やってみよう。漫画は、面白ければいいんだ」

○同人誌即売会場

看板 『海賊版天ファル、最新話発売!』

黒山の人ばかり。

柱の陰で読み終えた山根、渡辺。

ラストのコマは、黒騎士の甲冑の中身が空っぽの驚きで「つづく」に。

山根 「ヤバい。面白いですよ、ナベさん!」

渡辺 「ううむ……まさか黒騎士が空っぽとは!……敵ながら天晴」

山根 「妨害とかしてる場合じゃないですよ。

俺、漫画に携わる端くれの者として、彼らと正々堂々と戦いたくなりました」

渡辺 「若いな」

山根 「だめですか」

渡辺 「漫画は若者のものだ。それでいいと思う」

山根 「また、若者のふりして!」

渡辺 「いや。俺は単純に、こっちの続きも見てえんだ」

山根 「同意です!」

○コンビニの前

チャンプを読む4人。

菲澤 「流石に神がかりは落ちてきたか？」

評価サイト 本家7 海賊10

○ミツルギの仕事場

メモ 『黒騎士の甲冑、空っぽ』

にすでに×がしてある。

ミツルギ「……」

○デッドヒート

漫画を描く菲澤たちとミツルギ。

コンビニでチャンプを読む4人。

本家 7、6、5、9 海賊8

本家 8、7、7、9 海賊5

○仕事場

上山 「ダメだ……もうネタ切れだ……」

菲澤 「もう一回原作を頭から読むんだ。答
はここにある」

× × × ×

読む二人。

菲澤 「4回対1回だと、どうしても後手つ
ぽくなっちゃうな」

上山 「……」

菲澤 「だめだ、原典に集中しよう」

上山 「……」

菲澤 「……こっちも、週刊連載する？」

上山 「無理っスよ。俺仕事やりながらの兼
業っスよ」

菲澤 「このペースだと……ページ数的には
1カ月後、抜かされる」

上山 「隔週なら？」

菲澤 「2カ月後だな、追いつかれるの。抜
かされるか、追われ続けるか」

上山 「抜かされたら？」

菲澤 「追いつけるか？」

上山 「……読みましょう」

葦澤 「そうだった」

上山 「……」

葦澤 「……」

上山 「俺、隔週やってみます」

葦澤 「月1の即売会で、2話ずつ出すってこと？」

えりりん、寺嶋、青い顔に。

葦澤 「無理か。作画が間に合わん」

えりりん 「バイト休めば行けるけど」

葦澤 「バイト？」

えりりん 「テレホンオペレーターのもの」

葦澤 「漫画家だけじゃなかったの？」

えりりん 「生活安定させようと思って」

寺嶋 「こっちも、別のアシ断れば」

葦澤 「……どうする」

上山 「最終回を先に描く。葦澤さんはそう言った。こつちが先に、太一をアルファ村に帰還させるんだ」

4人、うなづく。

○デッドヒート

描き続けるミツルギ、4人。

本家6、7、7、6 海賊9、7

本家7、6、7、6 海賊5、2

○仕事場

葦澤 「ついに2点つけられたか……」

机の上のたくさんのネームたち。

上山 「これも没……ですよね……」

えりりん、寺嶋はスケッチをしている。

えりりん 「あの、食事とか行きませんか。空

気悪いです」

葦澤 「2とか気にするな。たまたまだよ」

上山 「たまたまじゃないですよ。……それが俺の実力です。そんなにポンポンアイデ

アなんか出てこないです。俺もう締め切りに追いつかれちゃったんだ……」

葦澤、ネームたちを握りつぶす。

菲澤 「よし。……落とそう」

上山 「えっ」

菲澤 「休載だ」

えりりん 「そんな。本家の一番不満なところを、こつちがやる意味あります？」

上山 「落として、どうします？ 何週待たばいいアイデアが出ます、なんて保証できないすよ」

寺嶋 「ここにあるアイデアを組み合わせて、何かできないの？」

菲澤 「……」

上山 「？」

菲澤 「正直に言っただけか」

上山 「何ですか？」

菲澤 「俺、これをすぐ言うから、若者に嫌われて、作家や編集者たちにも敬遠されて、で一人ぼっちになっちゃった。だけど大事なことから、このチームが解散するリスクを背負ってまで、言うぞ」

上山 「はい」

菲澤 「つまらないんだ」

上山 「……」

菲澤 「これも。これもこれも。正直につまらない。だから休載だ。面白いものしか、世に出すべきじゃない」

上山 「……」

菲澤 「……いや、すまん。ここから面白いものを拾って、組み合わせるのも編集者の仕事だ。ブレインストーミングは否定すると委縮して……」

上山 「いや。むしろ吹っ切れました」

菲澤 「？」

上山 「やっぱそうなんだって。やっと勇気をもって、鏡で自分を見た気がします」

寺嶋 「……ひとつ、いいかな」

菲澤 「？」

寺嶋 「俺背景だけどさ、背景って人物よりも目立つちゃダメなのね。裏方みたいなものだからさ。でも最近人物の絵に力がなくなってる、正直背景の力下げて調整してん

のよ」

えりりん 「絵は、変えてない」

菲澤 「変えてなくても伝わるんだな。漫画の怖さだ」

寺嶋 「あの、俺好きなキャラいてさ。ノリスとガラム」

上山 「タイタニア編以来出てないキャラ」
寺嶋 「なんか最近の流れ、『終わらそう』つ

て感じになって、ノリスとガラムとかがおっかなくて出れそうにない感じになってるといふか。初期の頃の『俺たちは天ファルを愛してる』って感じじゃないんだよ今」

上山 「……そういわれれば、そうかも」

菲澤 「そうだな。俺たちは、俺たちの天ファルを書けばいいんだよ。原点に戻る。そうしよう」

上山 「……よし、じゃあ熱海行きます」

菲澤 「A—TAMIの天井？」

上山 「いや。俺たちがもう一回熱海に行つて充電してきます」

菲澤 「そっちの天井かよ！」

えりりん 「やった！」

上山 「あ、充電じゃなくて放電か」

えりりん 「すげべ！」

○翌日、誰もいない仕事場

菲澤が一人で床に自分のアイデアメモを散らばせて考えている。

SNS 『海賊版休載かよ（笑）』

SNS 『本家のマネすんな（笑）』

SNS 『負けを認めろ（笑）』

菲澤 「……家に着くまでが、遠足です」

アイデアを紙に書きつづける。

○熱海のホテル、前

湯煙に包まれる温泉街。

えりりん 「また、来ちゃったね」

上山 「俺たちの聖地」

○夜、布団の中の二人

裸（事後）。

えりりん「ね。初めて漫画に出会ったのはいつ？」

上山「漫画に？」

えりりん「私が『天空のファルコーン』に出会った日のことはまだ覚えてるの。児童館にコミックスの3巻が置いてあって、衝撃を受けて夢中になったの。冬の寒い日で、石油ストーブの匂いがして、窓からは午後斜めの光が差し込んで、時間が止まったかと思ったの。世界に、私と漫画しかないって感じた」

上山「……へえ」

えりりん「でもそれまでに漫画自体には出会ってたと思うのね。でも最初の漫画って何だったか、思い出せなくて」

上山「……ドラえもんとかその辺かなあ。いつも漫画はそこにあっただもんね。……床屋？」

えりりん「床屋さんの漫画、いつも続き分らなくなるよね」

上山「だから一話完結ものばっか読んでた」

えりりん「わかる」

上山「……太一は、無事アルファ村に帰らななきゃならない。旅立ったら、帰還するベきだ」

えりりん「家に帰るまでが遠足です」

上山「俺はそう思ってこれを始めた。でもミツルギ先生の方が、太一をうまく家に帰せるかも知れない」

えりりん、拳で頬をむぎゅつとやる。

えりりん「私はジーク様の死に、納得してる。それが太一の『失うべきもの』だったことに、感動したんだよ？ それを信じて」

上山「……」

○夜、露天風呂でセックスする二人

上山 「あつ！ 思いついた！」
えりりん 「えっ！」

上山、慌てて脱衣場に戻る。
えりりん、取り残される。

えりりん 「えっ……えっ……」
上山、戻って来る。続き。

○砂浜で海を見る二人

上山 「タイトルの『天空のファルコーン』の意味。天空城が序盤に出て来たただだから、『天空の』はただの枕詞だと思われてるじゃん？ 魔剣ファルコーンも天空城のピオリア姉さまから太一が託された、七本の剣の一振りに過ぎないって」
えりりん 「うん。……あ。天空城を復活させる？」

上山 「(うなづく) 天井だ。もう一回使う」
えりりん 「どういうこと？」

上山 「動き出した大巨人ギガント。七本の剣では倒せない。だけど天空城が動いて空から攻める。『神々の杖』を大巨人に落とすんだ。巨人の弱点は頭」

空を仰ぐ二人。

二人には天空城が見えている。

えりりん 「……竜の翼をもつ一族の、背に乗って」

上山 「そうだ。太一が天空からファルコーンを叩きつける」

えりりん 「(感動で涙が出てくる)最後の最後の最後に、タイトル回収するやつじゃん！」

上山 「好きだろ？」

えりりん 「大好き！」

上山 「(鼻を膨らませる)俺はえりりんをもっと好き」

えりりん 「私もダーリンをもっと好き！」

二人は肩を寄せ合う。

上山 「……いや、今は『天ファル』かも」
えりりん 「……私もそうかも」

二人 「……似たもの同士」

○帰りの電車の中

眠る上山。

えりりんは必死にスケッチする。

竜一族の背に乗り、剣を構える太一。

× × ×

回想、児童館。

石油ストーブ、窓からの光。

長椅子の上に置きっぱなしの3巻。

それを見つけて開いたえりりん(9)。

回想、床屋の待合室。

ふと1巻を取った上山(8)。

二人は、じつと世界に入っている。

× × ×

眠る上山の髪を撫でるえりりん。

えりりん「最高の、ラストにしようね」

○仕事場

アイデアメモを読み終えた葦澤、寺嶋。

葦澤 「これだよこれ！ すげえ！ さすが

神！」

机の上の葦澤のアイデアの束に気付く

上山。

上山 「ニラさんも、アイデア出してくれて

たんですね」

それをバーンと床に捨てる葦澤。

葦澤 「バツカ野郎！ こんなクズはいいん

だよ！ 最高じゃねえか、神々の杖！ 天

空からの一撃！」

寺嶋 「雲の流れを研究しなきゃ。17世紀

のエッチングみたいな雲。『ラピュタ』を越

える雲だ」

えりりん「おねがいます」

上山 「ひとつ提案があります。毎週連載し

ましょう」

葦澤 「は？ 会社あるだろ」

上山 「いつか面白いことがあった時のため

に、有給を貯めてありました。今が全部使う時です」

菲澤 「何日分？」

上山 「8営業週、つまり二カ月は休めます。

それなら、同時に最終回を発表できる」

菲澤 「(指折り数える)……行ける。行けるな。でも同人誌イベントは毎週ない。ネットでやるか？」

上山 「やるなら毎週月曜日に直接対決しましょう」

菲澤 「盛り上がってきたね！」

えりりん「4週まとめ本を紙で売りましょう」

菲澤 「たしかに！ これまでのまとめ本は需要あるし！」

上山 「死神の剣は3本。13×3で39。

天空のファルコーンは39巻で終わるよう調整されている筈だ」

菲澤 「だから同時に終われると？」

上山、うなづく。

菲澤 「……俺たちの天ファル、突っ走るぞ」
4人、ハイタッチするが、またタイミングが合わない。

菲澤 「へたくそか！」

○仕事場、コンビニ、ミツルギの仕事場

必死で描く4人。コンビニでチャンプを読む4人。ミツルギも描き続ける。

評価サイトはデッドヒート。

菲澤 「どんでん返しを今入れるぞ。ライラックの魔女と黒騎士が同一人物だったって落ち、今やろう」

上山 「えっ、それは大ネタに取っついておいた……いや、今やっても辻褄はあう」

菲澤 「3週連続こっちが勝ってるんだ。波に乗るのは今だ」

○壁に投影されるSNS

SNS 『ネタバレ速報』 魔女Ⅱ黒騎士』

SNS 『このための伏線だったのか……!』
SNS 『完全に や ら れ た』
SNS 『俺は黒騎士が太一の父だと思ってた』
SNS 『兄のツバルとは』
SNS 『じゃ父のオルテガは死んでる説?』

○夜、スナック「敦子」

敦子 「だいぶ、デッドヒートね」

菲澤 「……ようやく、第四コーナー曲がつたよ」

敦子 「休載した時は、もう無理かと思った」

菲澤 「俺、才能の芽を摘んできたかも」

敦子 「？」

菲澤 「ほんとは若者だってぶつかり合いたかったんじゃないかとちよっと思っただ俺のぶつかりが強すぎて、ふつとばしてただけだったんだ」

敦子 「気づいてなかったのかよ」

菲澤 「もつと可愛がらないと。褒めるのもつまらんといいものも、同じ力でき」

飲み干すともう一杯出てくる。

菲澤 「なあ。この連載終わったら、ヨリ戻さないか？ 今ならお前に楽しませられるくらい稼いだし」

敦子 「お金だけが問題だと思ってる？」

菲澤 「……君は、きれいだ」

敦子 「(鼻で笑う)褒める話？」

菲澤 「そうしてでも、君を取り戻したい」

敦子 「……」

菲澤 「人間ってさ、怪物だよね」

敦子 「は？」

菲澤 「オルグノイエとかブラフリューとかノースフェイトとかの怪物を描けるのは、人間にその素養があるからだ。他人を理解すればしようとするほど、奥にいるのは怪物だと分る。きみが俺を怪物だと思うように、俺はきみもまた怪物だと思うわけ」

敦子 「それで？」

菲澤 「だけどきみという怪物のそばに、ま

「たいたいんだよ。理解しても分らない怪物
というんだと思えば、そんなに難しくない」

敦子 「私の好きな怪物は？」

菫澤 「ビィエル」

敦子 「(首を振る) はずれ」

二人、苦笑いしながら微笑みあう。

○朝、コンビニ前

チャンプを読み終えた4人。

最後のページに「あと4話」と。

えりりん 「読み通りになった」

菫澤 「あと4回で、同日最終回だ」

評価サイト。本家 8 海賊 9

総平均 本家 8・2 海賊 8・2

寺嶋 「平均点でついに並んだぞ」

菫澤 「あと4回、死ぬ気でやるぞ。ギガン

トを天空のファルコーンで倒し、太一はア

ルフア村の前で『ただいまー！』って叫ぶ

んだ」

上山 「第一話の『行ってきます！』と対
になるように」

4人、立ち上がる。

駐車場が光の面と陰の面に。

陰にいた4人は、光の側にゆく。

○仕事場、夜

猛烈に描くえりりん。ネームを切る上

山。サイトにアップするテストの菫澤。

背景の雲を描き続ける寺嶋。

○別日、仕事場

フードを取るスペクターの絵。

上山 『あなたが、父さんだったのか……』

菫澤 『過去へ戻るライラックの扉を潜って、

私は過去へ飛ばされた。フードを取ること

能わぬという魔女の契約で、私は謎の男ス

ペクターとして生まれたのだ』

寺嶋 「『見よ！ 天空の城が、神々の杖を発動する……！』」

上山 「ゴウンゴウンゴウン……太陽が天空城で隠れ……」

えりりん 「びたり……」

4人 「ずん！」

SNS 『スペクターⅡオルテガの二重どんでん』

SNS 『これ本家越えたる！』

嵐のように書き込みが増える。

○デッドヒート

あと2話 本家10 海賊10

あと1話 本家10 海賊10

最終回 本家 海賊

○深夜、仕事場

机で一人描き続けるえりりん。

手が真つ黒で寝入っている寺嶋。

その隣で潰れて寝ている上山。

その隣でノートPCを持ったまま寝てる蕪澤。

最後の一笔を描き終え、ペンを置くえりりん。

えりりん 「……」

絵を保存する。

寝てる3人の手を取り、蕪澤のノート

PCのスペースキーの上に置く。

マウスを「公開」のボタンに合わせ、

3人の手の上から自分の手で押す。

蕪澤 「んっ（起きる）」

えりりん 「……終わりましたよ」

蕪澤、重ねられた手に気付く。

えりりん 「みんなで、最後の投稿をしました」

蕪澤 「そうか。……ありがとう。……おつかれさまでした」

えりりん 「……こちらこそ。誘っていただき

て、本当によかったです」

窓の外は明るくなっている。

菲澤 「いかん！」

その声に上山、寺嶋起きる。

菲澤 「コンビニ行くぞ！」

○早朝、朝もやのコンビニ

トラックがやって来る。

走ってきた4人、大声で呼び止める。

○コンビニ前で座る4人

同時に読み終えた4人。

4人 「……」

号泣。

同時にページを戻り、また最初から読みなおす。読み終えて号泣。

4人 「……」

また最初のページに戻る。同時に笑い、同時に泣き、同時に胸を打たれる。

菲澤 「……たがいま。最後のセリフは、同じだった」

上山 「……こっちの方がおもしろいですね。」

正直

寺嶋 「絵では負けてない」

えりりん 「首を振る」ラストの太一の瞳の輝

きは、負けです」

菲澤 「……スゲエな。ミツルギ剣」

4人、同時に腹が鳴る。

菲澤 「終わったら寿司屋で打ち上げだーっと思ってたけど、まずはカップラーメン食おうぜ」

4人で並んでカップラーメンをずるずると食べる。

上山 「夜明けの味がする」

3人 「……」

太陽が昇り切る。

と、菲澤に電話がかかって来る。

菲澤 「は？ 誰？ 今？ ……戸田？ もしもし？」

以下、精鋭社編集部でPCで海賊版を
見ている戸田とカットバック。

戸田 「先輩ご無沙汰です。先輩のことだから朝一で最終回読んだらうと思って、電話しました」

葦澤 「……精鋭社の編集さんとして、おめでとうを言うよ。正直、俺たちの負けだ。面白かった」

戸田 「……ニラさんなら正直に言うと思いました。ニラさんらしい。あ、電話したのは用件があつてですね」

葦澤 「用件？」

戸田 「ミツルギ先生が、そちらのチームと会つて話したいと」

葦澤 「ミツルギ先生が？」

戸田 「……もちろん、今じゃなくていいですよ」

葦澤 「いや。今日会いたい。会うべきだ。……（3人を見て）でも俺ら徹夜明けでボロボロなんだ。一回家帰つて寝るから、たとえば昼過ぎじゃダメか？」

戸田 「いいですよ。吉祥寺の打ち合わせに使つてる喫茶店ご存じですよね？」

葦澤 「マリエか」

戸田 「3時でいいです？」

葦澤 「承知」

電話を切つた葦澤。

上山 「寝れるかな」

葦澤 「まずは泥のように寝よう。2時にモニターコールする」

○色々な所で漫画を読む人たち

本屋で、QTがチャンプを読む。
公園で、サラリーマン1と2がタブレットの葦澤版とチャンプを読み比べる。
スナックのカウンターで、敦子がタブレットを読む。
皆、天を仰ぐ。

○吉祥寺、五叉路

五叉路。

それぞれの道から、葦澤、上山、えりりん、寺嶋がやって来る。
合流して、一本の道へ進む。

○喫茶「マリエ」前

戸田が待っている。

戸田 「おつかれさまです！」

葦澤 「おう」

戸田 「すでにミツルギ先生は中に」

4人は中に入ろうと。

戸田 「正直、途中はニラさん版の方が面白かったです。A―TAMIも良かったし、ジークの死が、失うものは得るものの為にある、という苦いテーマも、大人になった読者に響いた」

葦澤 「だけど、ラストは負けだ」

戸田 「ニラさんだけなんですよ」

葦澤 「何が？」

戸田 「出版社が潰れるって言った時、最初に作家さんどうすんの？って心配したの」

葦澤 「……そこ褒めてもな」

戸田 「ニラさんが、一番漫画を愛してる」

葦澤 「言い過ぎだろ」

中へ入る4人。

お辞儀をして、尊敬の念を示す戸田。

○喫茶「マリエ」、内

すでに大机についているミツルギ、山根、渡辺、そして犬塚編集長（60）。
入って来る4人を見て、立ち上がる。

葦澤、先に頭を下げる。

葦澤 「この度は……海賊版をつくって世間を騒がせて、大変申し訳ありませんでした！ 海賊首謀者の葦澤です。俺が彼らを集め、焚きつけました！」

ミツルギ「まあまあまあ」

犬塚「弊社は二次創作を認めています。ミツルギ先生の許諾もあります」

葦澤「いや、でも」

山根、渡辺、頭を下げる。

山根「コミケで追っかけっこは、正直やり過ぎました」

渡辺「火をつけたのも我々です」

ミツルギ「でも物理炎上で余計盛り上がったじゃん！燃えた同人誌は俺が全額印刷所に寄付したし」

山根「謎の寄付、先生だったんですか」

ミツルギ「面白かった！まずは握手！」

4人と握手。

ミツルギ「今日も戸田さんに無理やり頼んでさ、一度ちゃんと話したかったんだ！あ、座って！（ウエイトレスに）すいませーん、注文！」

4人「ぼかんとなる」

× × ×

ミツルギ「黒騎士の中身空っぽだったってやられたなー。ライラックの魔術なら、たしかに出来ることだ」

上山「ライラックの魔女と同一人物というのは、見抜いていたので」

ミツルギ「どのへんでバレてた？」

上山「同時に出る所がないんです」

ミツルギ「鋭い！フェイク入れときゃ良かったな！」

上山「考えました。魔術でもう一体黒騎士をつくれる余裕はあるし」

ミツルギ「その手もありか！なんでやんなかったの？」

上山「……本筋に、早く戻りたくて。ライラックの魔女の正体に話を戻すべきだと」

ミツルギ「同意！人気キャラだけど、重要なのは、太一の物語ってことだもんね」

上山「あれだけのキャラを生み出して、やっぱ主人公なんですか？」

ミツルギ「うん。そう。天フルは、太一の

物語。そこはブレてない。人気キャラに乗っかって話が広がるのはいいことで、商売としては儲かった方がいいのは分るけど、でも重要なのは太一の父探した」

上山 「同意します」

ミツルギ 「いや、でもライラックの魔女が兄のツバルと同一人物ってバラすの早すぎない？」

上山 「それは正直、勢いを加速するために早めました」

ミツルギ 「えっ、プロット変えたってこと？ 上げえなその判断！」

上山、葦澤を見て。

上山 「編集のニラさんが、いい判断をしてくれて」

葦澤 「波に乗ってる時に変えさせることが出来るのは、編集だけなので」

ミツルギ 「いい判断だった。あそこで勢い負けしたもののね」

葦澤 「恐縮です」

ミツルギ 「あ、じゃあブル姐とゼロのラブストーリーは考えた？」

えりりん 「ハア？」

思わずみんなえりりんを見る。

えりりん 「ゼロきゅんはジーク様でしょ！」

ミツルギ 「知ってる。人気カプナンバーワンってのもね。だから裏返して、ブル姐にならゼロをあげてもいいでしょ？」

えりりん 「まあ…ブル姐なら」

ミツルギ 「もしジークフリードが死んだら、ゼロはまた孤独になる。何もない孤児だからゼロと名付けられた子供に」

えりりん 「そうなの！ だからジーク様が死ぬのは私最初びっくりして泣いちゃって…」

ミツルギ 「ジークを殺そう、って最初に言ったのは誰？」

上山 「小さく手を挙げる」

ミツルギ 「(うなづく) 正直、俺もそうしようって思ってた」

上山 「えっ」

ミツルギ 「だってその方が正解じゃん。失うものは得るものだ、ってきちんとテーマに落ちる。でもそうじゃない世界線もあるだろって。ジークフリートは死ぬべきじゃないって」

菲澤 「なんですか！ それが正解でしょ」
ミツルギ 「……世界は、そうあるべきじゃない、からかな」

菲澤、上山 「？」

ミツルギ 「この世は残酷でめちゃくちゃで、怪物だらけだ。それがこの漫画が提示したダークファンタジーの世界観。それがここ最近の残酷な世界とシンクロしてると思ってる。だからヒットしたんだと」

菲澤 「はい」

ミツルギ 「だからこそ、だよ。希望はあるべきだ。ジークが死んだら世界は残酷だと認めたことになる。世界はこうあってほしい、世界はこうあるべきだという、人々の願いみたいなものを無視することになる」

上山 「願い」

ミツルギ 「だからジークは死なせない」

喫茶店のテレビでニューが流れている。

『ロシア・ウクライナ 停戦』

菲澤、上山、えりりん、寺嶋「えええええ？」
キヤスター「本日月曜日はロシア、ウクライナでも現地語版の少年チャンプが発売されます。今週号は『天空のファルコーン』、通称天ファルの最終回の号です。それを読むために、両国は戦争を辞めることにしました」

戦場で、兵士たちがチャンプを読んでいる。読み終えた人同士、抱き合っている。

菲澤 「マジか」

ミツルギ 「世界はこうあってほしい。それはどんな人間でも同じだと、俺は思うよ」

上山 「でもジークを失わずに旅を完結させるってめちゃくちゃむずくないですか？

「だから俺は……」

ミツルギ「だから俺は、9年考えた」

全員「……」

菲澤「それが、俺たちの敗因か」

ミツルギ「？」

菲澤「俺は、俺たちの天フアルを考えてい

た。ミツルギ先生は、みんなの天フアルを

考えてた」

ミツルギ「(微笑む)」

回想。

黒板に色んなアイデアを書いては消し、

書いては消すミツルギ。

コミケ会場で海賊版第一話を読む。

黒板にいくつも分岐しているストーリー

。その一本に、大きく×をつける。

ミツルギ「君たちがジークが死ぬ世界を見せ

てくれなかったら、危うくそっちへ行く所

だった。だからお礼を言いたくて」

頭を下げる。

上山「だって、じゃあギガントの目覚めが

うまくいかなくなりますよ！」

ミツルギ「ゴールデンドーンを使える」

菲澤「失うものがなくなるだろ！」

ミツルギ「すでに太一は、アルファ村を失っ

ている」

えりりん「じゃあブル姐がゼロキゅんを取ら

なくてもいいじゃないですかあ！」

ミツルギ「ゼロソード・グラビティ」

えりりん「ぐにょん、あ、ジークフリート

×太一ってこと？」

ミツルギ「ストームのインフェルノもそれで

防げる」

菲澤「……なんで気づかなかったんだ！

そっちから考えればよかったのか！」

くやしがる菲澤。

ミツルギ、立ち上がる。

ミツルギ「もう一度握手させてくれ。もう一

人の……いや、もう四人の、天空のフアル

コーンの騎士たちよ」

握手を交わす5人。

○喫茶「マリエ」、外

に出た一行。

突然、編集長が。

犬塚 「チャンプ編集長の犬塚です。折り入って皆さんにお願いがあるんですが」

葦澤 「？」

犬塚 『『天空のファルコーン』のスピノフを弊誌で連載してくれませんか』

上山 「えっ」

えりりん 「それって、チャンプ連載ってこと？」

犬塚 「もちろん本誌です。ゼロソードのその後の話でもいい。スペクターやブル姐の過去ストーリーでもいい」

ミツルギ 「僕は終わらせた。だからやらない」
犬塚 「アニメの第三期が始まります。百人以上のスタッフがいます。ミツルギ先生の30人のアシスタントも散り散りに。彼らは毎週の仕事があれば食えない。彼らを路頭に迷わせないために、どうかあなたたちにスピノフをお願いしたい。少年チャンプを救ってください！」

その場でバク転土下座。

葦澤 「バク転土下座、リアル成功者第一号だ！」

犬塚 「半年間、練習して参りました！」

上山 「……お断りします」

犬塚 「えっ」

上山 「人のふんどしで相撲を取るの、これで最後にしたいです。次書くとしたら、僕はオリジナルを書きたいです」

ミツルギ、ほほえむ。

犬塚、山根、渡辺、泣き顔。

葦澤、上山の肩を叩く。

ミツルギ 「これからしばらくチャンプは看板漫画が抜けて低迷すると思う。でもそれいいんだ。新しい作家が育って、ひこばえのように穴を埋めていくよ。俺も初めての

連載だから、二度とヒット出せないんじゃないかってビビってて。でも新作って思いつくもんだね」

犬塚 「そ、それは是非！」

ミツルギ 「終わらせると、始めることができるよね」

菲澤 「……」

○帰り道く五叉路

無言で歩き続ける4人。

傾きつつある午後の光。

長い一日だった。

そして、五叉路で立ち止まる。

菲澤 「あ。俺、こっちなんで」

えりりん 「私こっち」

上山 「俺こっち」

寺嶋 「俺こっち」

と、全員別々の方向を指さす。

全員 「……」

菲澤 「俺さ、新しい出版社、立ち上げようと思うんだ」

上山 「ニラさんが？」

菲澤 「紙か電子か分らないけど、出来れば紙だな。まあ、したらまた描いてよ」

上山 「俺は、会社辞めようと思ってます」

菲澤 「えっ」

上山 「新作作って、ニラさんとこ持ち込みますよ」

菲澤 「どんな話？」

上山 「まだ考えてないけど、たぶん少年漫画じゃなくて青年漫画かな。天ファルの読者は卒業した。でも、次の読者がいるでしょ」

菲澤 「うん。そうだ。次の人の為の、次の漫画。作画はえりりん先生で」

えりりん 「私も一本描きたいがあるので、

作画は別の人をお願いしたいです」

上山 「えっ」

えりりん 「あ、ダーリンとは別れないですよ、

もちろん。でも私だって、作画だけじゃなく、一本の漫画家としてやりたいんです」

菲澤 「どんな話？」

えりりん 「ある男が過去にタイムスリップして、記憶を失う。そしてまだ付き合う前の妻と出会って、もう一度恋に落ちる話です」

菲澤 「いいね」

えりりん 「一人で描く自信はなかったけど、やってみたくまりました」

菲澤 「じゃあテラさん絵描いてよ」

寺嶋 「無理だよ。俺だって一本描きてえんだ」

菲澤 「どんなの？」

寺嶋 「人間が描けないのなら、ロボットかバイクを主人公にすればいいんだよ。ロボットかバイクが女子高生に恋する話をやりてえ」

上山 「バイクの方が面白そう」

菲澤 「うん。上山先生の作画は、また探す」

上山 「また悪知恵、働かせてくださいよ」

菲澤笑って、上山の背中を叩く。

全員 「……」

菲澤 「じゃ、また」

3人 「また」

4人はそれぞれ、4本の道へと歩き出す。

菲澤ふと気づくと、行く先に敦子が迎えに来ている。小さく手を振る敦子。

4人は別々の道へ遠ざかってゆく。

おそろおそろ、胸を張って。

【参考資料】

- 『HUNTER×HUNTER』富樫義博、集英社
1998～、38巻
- 『ガラスの仮面』美内すずえ、白泉社
1975～、49巻
- 『メルセルク』三浦健太郎、白泉社
1989～、42巻
- 『BASTARD!―暗黒の破壊神―』萩原一至、集英社 1988～、27巻
- 『はじめの一步』森川ジョージ、講談社
1989～、141巻
- 『あひるの空』日向武史、講談社
2004～、51巻
- 『バガボンド』井上雄彦、講談社
1998～、37巻
- 『リアル』井上雄彦、集英社
1999～、16巻
- 『ジョジョの奇妙な冒険』シリーズ、荒木飛
田彦、集英社 1986～、135巻
- 『NANA』矢沢あい、集英社
2000～、21巻
- 『賭博黙示録カイジ』シリーズ、福本伸行、
講談社 1996～、91巻
- 『ファイブスター物語』永野護、角川書店
1986～、17巻
- 『ボ一の一族』シリーズ萩原望都、集英社
1972～、7巻
- 『宇宙兄弟』小山宙哉、講談社
2007～、44巻
- 『鉄拳チンミ』前川たけし、講談社
1983～、87巻
- 『喧嘩商売』シリーズ、木多康昭、講談社
2005～、37巻
- 『ロータローまかりとおる!』シリーズ、蛭
田達也、講談社 1982～、94巻
- 『グラップラー刃牙』シリーズ、板垣恵介、
秋田書店 1991～、154巻
- 『タフ』シリーズ、猿渡哲也、集英社
1993～、113巻

『強殖装甲ガイバー』高屋良樹、徳間書店、
角川書店 1985～、47巻
『イタズラなKiss』多田かおる、集英社
1990～1999、23巻（作者死亡により未完）
『火の鳥』手塚治虫、角川書店ほか
1954～1988、11巻（作者死亡により未完）

【全部読んでいないが参考にしたもの】

『ONE PIECE』尾田栄一郎、集英社
1997～、110巻
『名探偵コナン』青山剛昌、小学館
1994～、106巻
『超人ロック』聖悠紀、メディアファクトリ
―他 1967～2023、111巻（作者死亡により
未完）
『王家の紋章』細川智栄子あんど芙くみん、
秋田書店 1976～、70巻
『クリスタル☆ドラゴン』あしべゆうほ、秋
田書店 1981～、12巻
『島耕作シリーズ』弘兼憲史、講談社
1983～、99巻
『パタリロ!』魔夜峰央、白泉社
1978～、104巻
『ヒストリエ』岩明均、講談社
2003～、12巻
『キン肉マン』ゆでたまご、集英社
1979～、86巻
『ふたりエッチ』克・亜樹、白泉社
1997～、93巻
『美味しんぼ』雁屋哲、花咲アキラ、小学館
1983～、111巻
『クッキングパパ』うえやまとち、講談社
1985～、171巻
『難波金融伝・ミナミの帝王』天王寺大、郷
力也、日本文艺社 1992～、179巻
『気まぐれコンセプト』ホイチョイ・プロダ
クションズ、小学館 1981～（コミックスな
し）